＜前回＞イスラームと 12 世紀ルネサンス

（１）中世は暗黒時代ではない

１．中世社会の変動と新しい宗教性の展開

２．大学の時代、中世科学の進展。

外的要因としてのイスラーム

中世キリスト教世界のダイナミズムは、中世の外部としてのイスラームとの相互関係なしには、理解できない。

断続的に繰り返されるルネサンス（イタリア･ルネサンスはその最後の波）

３．カロリング朝ルネサンス

「カロリング朝期に生まれたヨーロッパの内でもっとも評価すべきもの、それはおそらく文明のヨーロッパである」、「シャルルマーニュにとって、知、教養とは、欠くことのできない権力を誇示し、行使することであった。知識を奨励し保護することは、君主の基本的義務のひとつである。」（ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店、96）

「学者たちの第二波」「敬虔王ルイ、禿頭王シャルル」「宮殿のほか、あたらに建設された大修道院がその中心地」、「カロリング朝の知的活動がヨーロッパ文化の古層を形づくったという事実」「国家の統治における知の重要性、それがもたらす権威を、シャルルマーニュは「古典を学ぶことについて」と題する法令で強く訴えている」

「書体改革」「アルクインは」「句読法を導入」、「聖書の本文を修正させた」、「正しい原文の追求」（99）、「彩色写本」、「装飾写本」、「九世紀はまた、西洋の宗教建築の未来にとって非常に重要」

（２）イスラームとキリスト教世界

４．自然学、古代ギリシャからキリスト教世界へ

古代ギリシャの自然学（古代科学）→東ローマ帝国→ペルシャ帝国→イスラーム世界→中世ヨーロッパ世界（イベリア半島など。平和的共存と軍事的接触）

12 世紀ルネサンス、13 世紀中世科学・スコラ：修道院から大学へ

キリスト教的古代から中世までの全体において、文化は東から西に伝播している。

５．十字軍における軍事的接触とは別の経路・別の交流

イベリア半島における三宗教共存（寛容の文化）の一つの可能性

哲学（アリストテレス）、科学（自然学）、建築、文学（11 世紀のイスラームにおける愛の伝統が、トゥルバドゥールの発生を刺激した。ロマンティック・ラブの成立（伊東、1993、227-270））の相互交流。

レコンキスタによって平和的共存は終焉　→　強制改宗か追放かの時代へ。
マラノか亡命か

６．「アンダルスは七〇〇年以上、アメリカ合衆国のざっと三倍にもおよぶ期間にわたってヨーロッパにイスラームが存在したことの、まごうことなき印である」（メルカル、6）

「深くアラブ化したユダヤ人がヘブライ語を再発見、いや、ふたたび創案したのはまさしくアンダルスにおいてであった。イスラームの統治下で生活するキリスト教徒ばかりか、イベリア半島における政治的支配を奪還したキリスト教徒までもが、哲学などの知の様式からモスクの建築様式にいたるまで、アラブ的様式のあらゆる面を受容したのもまさにそこであった。アベラールやマイモニデスやアヴェロエスのように、揺るぎない信念の徒が、それぞれの信仰を横断して、哲学的、科学的、宗教的事実を追い求めるなかで、いかなる矛盾にも出会わなかったのもやはりそこであった」（8）

「コルドバの図書館」（32）

「共存という社会実験」「征服後の社会では、キリスト教徒が主体となってムスリムとの共存という社会実験が行われることになったのであり、これはヨーロッパ史上初めての試みであった。」（小澤、271）

７．ヨーロッパを移動する人々による知と文化の交流・伝達
　聖地巡礼、移動する労働者（ギルド・職人、商人）、外交交渉、学生・説教者、マイノリティー（女性、ロマ、ユダヤ人）、
・コペルニクス（1473-1543）の場合**（３）中世科学と 12 世紀ルネサンス**
８．イスラーム科学：8 世紀のアッバース革命、この王朝の下でのイスラーム科学（8 世紀から 15 世紀）の黄金時代（8 世紀から 11 世紀は西欧科学を圧倒、12 世紀からラテン世界へ流入）、アラビア語による科学。イラン人、トルコ人、ユダヤ人など。
９．12 世紀ルネサンスの開始：大翻訳運動、アラビア語からラテン語へ
「こうした「一二世紀ルネサンス」の結節点となったのが、イスラーム世界との接点の多いシチリアとスペインであった。シチリアとスペインの翻訳活動を通じ、西ヨーロッパにアリストテレス哲学や新プラトン主義、自然科学の様々な知、イスラーム世界の知的伝統が紹介され、「一二世紀ルネサンス」と呼ばれる西ヨーロッパ世界の知的復興運動が生じたのである。」（関、151-152）。

７．スコラ的文化総合と大学の時代

（1）宗教と文化

１．「キリスト教と文化」の関係についての類型論（ヘルムート・R・ニーバー）
　キリスト教と世俗文化との関係性をめぐっては、これまで多くの議論がなされてきたが、ニーバーの類型論はその古典的な研究といえる。
　断絶・対立（テルトゥリアヌス、トルストイ）
　　／中間（差異を前提とした関係付け。
　　階層性：スコラ的文化総合
　　緊張：ルター
　　回心・変革：ヨハネ、ニーバー自身）
　　／連続性（自由主義神学）
　　東方敬信『H・リチャード・ニーバーの神学』日本基督教団出版局。
　　キリスト教思想史・キリスト教史、組織神学、キリスト教倫理
２．スコラ的な文化総合
　階層的秩序：自然と超自然の区別と調和 → キリスト教世界に構造的安定性をもたらす。
　「存在の大いなる連鎖」（神から物まで）
　偽デオニュシオース・アレオパギテース
　天上の位階／教会的位階／世俗の身分秩序
　cf. 近代以降、近代から現代へ
３．スコラ学（13 世紀）
哲学（ギリシャ哲学）と神学：単純に区別できる関係ではない。相互連関・相互影響。
　・アリストテレス（イスラーム経由）主義とアウグスティヌス主義
　・ドミニコ会とフランシスコ会
　　↓
　緊張関係
　　人間の魂・世界は永遠か？
神の知としての神学、「聖なる教」（sacra doctrina、トマス）
　聖なる教に属する神学と哲学の一部門としてのあの神学との区別
　自然神学と啓示神学、啓示神学と聖書
　↓
　神学の概念史における中世

４.「単に対象構成のラチオのみならず対象内容をも峻別するようになるが、トマスの「聖なる教」は、いわゆる「自然神学」に対立する意味での「啓示神学」よりも内容の範囲が広くて、いわゆる自然神学の取り扱う内容をも包含している。」（山田晶責任編集『トマス・アクィナス』中央公論社、84-85頁）

「自然の光のもとに知られうるもの」は、「啓示の光において知られうるもの」と部分的に重なる。同一の知識が、受け手の知性の段階に応じて、二つの仕方で知られる。

↓

存在と認識の階層構造

５．パネンベルク『学問論と神学』教文館。

「神学の学問性が十三世以来初めてその自己理解についての議論において優先的な役割を果たすようになったことである」、「十三世紀というのは、一二〇〇年頃にパリ大学が誕生したのを筆頭に最初の大学が誕生したのを見届けた時代である。」(15)

「たしかに「神学」という表現は、すでにかなり以前から流通していたが、もっとも狭い意味しか持っていなかったし、それが十二世紀おいてもまだ影響力を持っていた、つまり、キリスト教の教説、すなわり神や三位一体についての単なる呼び名として神学という表現が使われたのである。」(15)

「神学の学問性という主題は、神学を大学とのその中で結びつけられた諸学問との中に位置づけるという主題と共に与えられる。それゆえその主題は十三世紀において初めて、特にアリストテレスの学問概念に誘発されて生じたのである。それ以来、神学は知恵（sapientia）としてだけでなく、知識(scientia)としても理解された。その背景には、キリスト教の思惟の真理性を一般の思惟を基盤として確証するという基本的な思惟が働いている。このような関心は十三世紀以来、神学の学問性が神学の自己理解にとってもつ意義において表明されている。」(21)

６．ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち――パウロからカール・バルトまで』新教出版社。

「トマスの世紀であるまさにこの十三世紀に、教育の中心としての修道院が解体され、大学とともにそこでの学問が登場した時」、アリストテレスの哲学は「画期的な作用を及ぼすことになった。」(153)

「神学のために中世的・ローマ・カトリック的なパラダイムの成熟した古典的完成形」「神学全体の新しい構造化」

「(1)信仰より理性　(2)比喩的・霊的な意味より文字どおりの聖書の意味　(3)恩寵よりも自然本性　(4)特殊なキリスト教的モラルよりも自然法　(5)神学より哲学　(6)まとめれば、本来的にキリスト教的なものより人間的なもの」(168)

（２）中世都市とヨーロッパ文明の形

７．アーウィン・パノフスキー『ゴシック建築とスコラ学』ちくま学芸文庫。

「初期ゴシック建築がスゲリウス（シュジェ、シュジェール）のサン=ドニで誕生したしたのと同じ瞬間と同じ環境において、初期スコラ学が誕生したのである」、「思考することの新様式と、建てることの新様式」「とはともに、パリを中心とする半径一〇〇マイルに満たない円の中に包含される地域からはじまった」(10)、「盛期スコラ学は十二世紀の変わり目に始まったと一般に考えられているが、それはまさしくちょうど、盛期ゴシックの体系がシャルトルとソワソンにおいて最初の大成功をなしとげたその時のことである」(10-11)、「盛期スコラ学の顕著な諸特徴は盛期ゴシック芸術を性格づけている諸特徴と著しく類比している。」(11)

８．ル＝ゴフ

ジャック・ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店。
・13 世紀の意義
「十三世紀は、西洋中世の最盛期とみなされている。・・・十三世紀は、それに先立つ数世紀のあいだに現実的になったキリスト教世界の個性と新たな力がはっきり確立された世紀であった、と言わなければならない。またこの時期には、長期持続の観点からヨーロッパ・モデルと呼ぶことのできるようなあるモデルが重要性をもつようになる。」
「都市のヨーロッパの形成」、「商業の成功と商人たちの地位向上」「貨幣使用の普及」、「知の分野における成功」「学校」「大学」（224）。

・中世都市
「戦争の要地はなによりも領主の城にあるのだから、中世都市のもの軍事機能は二次的なものでしかない。古代において都市が果たしていた経済機能は中世に比べれば問題にならない」、「中世において都市は消費の中心になる」（225）
「農村の民衆は・・・奴隷、のちには農奴の地位にありつづけた人々で構成されていたのに対し、都市住民であることはすなわち自由であることだった。そもそも、こんなドイツ語のことわざが生まれたのは中世のことだ。「都市の空気は自由にする Stadtluft macht frei」。」（226）
「アルベルトゥス・マグヌス」「一連の驚くべき説教」「一種の都市の神学、都市の霊性論であり、狭くて暗い街路は地獄に、大きな広場は天国になぞられている。」
「都市では十二世紀以降、清潔さに対する配慮がみられ、しだいに舗装が施され、汚物と下水の処理に関する規則が定められ、・・・美的目的にかなうような建造物によって飾られるようになる」、「ウンベルト・エーコは、建造物のなかに具体化され、街のスコラ学によって理論づけられるこのような中世的美の出現をみごとに指摘している。」（227）
「城壁がすぐれて都市のシンボルだった」、「城門が特別な関心の対象」、「城門とは、人々が、家畜が、食料品が通過していく場所であり、内部と外部の弁証法の物質的な表れであった。このような弁証法はキリスト中世の本質であり、ヨーロッパ全域に深い痕跡を残すことになるものである。内部は、領域的にも、社会的にも、精神的にも、外部に対して特権化されていた。「内部化する［内面化する、自分のものにする］こと」は、ヨーロッパにおける伝統、価値となったのだ。」（228）

・大学
「今日なおも生きつづける伝統を打ち立てた創造とは、大学と呼ばれる「高等」学校の創設であった。」「一二二一年にパリで「パリの教師と学生の共同体 universitas magistrorum et scolarium」を指してはじめて用いられた、ウニヴェルシタスという名称」（270）
「中世の大学組合はふたつのモデルに従って成立した。パリのモデルでは、学生のみが法的にウニヴェルシタスを形成した。」
「十三世紀のヨーロッパにおける大学教師の出現は、商人の出現と並行して起こっている。商人はまず神にのみ属する時間を売ることをとがめられた（利子の儲けは眠っていても商人の手に入る）、・・・大学教師もまた、十三世紀には学問という神にのみ属する富を売ることをとがめられるが、彼に講義の対価を支払う学生を教えるという労働によって、やはり正当性を得ていたのである。商業労働のかたわらに、知的労働のヨーロッパが生まれる。大学教師はこうして、今日のわれわれのなら研究と呼ぶところの思考と著述の労働と教育労働を兼務した。」（271）

> 「聖ベルナールが十二世紀初頭に神にのみ属するはずの時間を売ったといって咎めていたのは、銀行家だけではありませんでした。彼は知を金と引きかえに売っている学校教師たちをも警戒します。」（ル＝ゴフ『中世とは何か』藤原書店、147）

ボローニャ大学（法科大学、1154/1252）、パリ大学（神学大学）、モンペリエ大学（医科大学）

学部間の序列：

基礎教養課程、三学（トリウィウム、文法学、修辞学、弁証学（論旨学））と四科（算術、幾何学、天文学、音楽）

法学部（民放と教会法）、医学部

神学部

・書物

「十二世紀ルネサンスの延長として、十三世紀には書物の発達が確かなものになった。」「最初の発達は四世紀から七世紀までのあいだ」、「コデックス[冊子本]」「写本にページの革命がもたらされた。」(279)

「イバン・イリイチ」「「一一四〇年頃、書物の文明において、修道院のページが閉じられ、スコラ学のページが開かれる」。」「新たな読書術の創始者は、パリ近郊のサン・ヴィクトール修道院の学識豊かで偉大な神学者であったサン・ヴィクトールのフーゴーである。」

「句読法が改良され、写本のなかには各種のタイトルや見出しが挿入され書物は章に分けられ、アルファベット順に分類された主題索引が加えられた」、「特別な聴衆を前にする時をのぞいては音読が放棄され、個人的な黙読が始まった」、「個人的読書のヨーロッパが生まれたのだ。」(280)

「十二世紀から十三世紀にかけて新たな部類に属する読者がその数を増し、書物の新時代が出現していた」、「十三世紀には、たとえば女性に向けられたあるタイプの信仰書が発達する。書物はだから、学校とともに、女性の地位向上のための手段のひとつとなったのだ。」(282)

・スコラ学

「十三世紀の、とくに大学での知的活動が残したもっとも重要な遺産は、スコラ学という名で一括されている方法と著述の総体である。つまりこれは、十三世紀以降学校と結びつくようになった、そしてとくに十三世紀の大学と結びついていた知的生産を指している。」

「スコラ学は、三学のひとつで、「対話的状況のなかで問いと答えよって論証を進める技術」である、弁証学から生じたものである」、「スコラ学の父は」「カンタベリーのアンセルムス」、「弁証学が目標とするのは」「「理解を求める信仰」である。」(286)

「大学ではます問題（クワエスティオ）が立てられ。つづいてこの問題が、教師と生徒たちのあいだで討論（ディスプタティオ）にかけられた。最後に、教師はこの討論された問題に対する解答（デテルミナティオ）を与える。」(287)

「大学教育は必然的結果として出版につながっていく」、「選集（フロレギウム）」「聖書や教父や古代作家からの引用の単なる寄せ集めではなく、それぞれの引用には当時の教師の注釈が加えられており、ここにはすでに選集がスコラ学の大全へと発展していくきっかけが見られる。欠かすことができない中間段階になったのは、また別の種類の書物で、格言の集成」「命題集（センテンティアエ）」、「ペトルス・ロンバルドゥス」(287)

「十三世紀になると、スコラ学の知的生産はとくにふたつの形をとって表された。ひとつは注釈である」、「伝統にも立脚しそれを進化させていくような、斬新な知」、「注釈者たちのヨーロッパ」、「もうひとつのもの、それは大全（スンマ）である。」(288)

「知の総体」「を有機的に関係づけ、神学という理論的に構築された集大成の中にまとめる」、「科学としての神学」「そもそも「神学」という言葉は十二世紀の発明で、大学人のさきがけ的な偉大なる教師アベラール以来のものです。」

「都市のみが」「都市に定着した托鉢修道会のみが」「このような新しい段階を記すことができたのであって、修道院や司教聖堂付属学校の古い世界はこのような状況に適応していませんでした。」（ル＝ゴフ『中世とは何か』藤原書店、150）

＜参考文献＞

１．ヘルムート・H・ニーバー　『キリストと文化』新教出版社。
２．芦名定道　『自然神学再考』晃洋書房。
３．中川純男・加藤雅人編『中世哲学を学ぶ人のために』世界思想社。
４．Ｅ．ジルソン『中世哲学の精神　上下』筑摩書房。
５．山田晶『在りて在る者』創文社。
６．Ｋ．リーゼンフーバー『中世哲学の源流』創文社。
『中世思想史』平凡社ライブラリー。
７．金承哲『神と遺伝子――遺伝子工学時代におけるキリスト教』教文館、100-108、225-227頁。
８．稲垣良典編『教養の源流をたずねて――古典との対話』創文社。
９．南川高志編『知と学びのヨーロッパ史――人文学・人文主義の歴史的展開』ミネルヴァ書房。
川添信介「第九章　専門と教養――中世パリ大学の理念から」